

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02830

研究課題名（和文）英語疑似法助動詞の意味論的・語用論的研究

研究課題名（英文）The semantic and pragmatic study of English quasi-modals

研究代表者

澤田 治美（Sawada, Harumi）

関西外国語大学・国際文化研究所・研究員

研究者番号：20020117

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果は、モダリティの概念の拡張と密接に関係したものであり、概略、以下のよう
にまとめられる。比較節の構造と意味、擬似法助動詞構文が従える不定詞句の構造と意味、For不定詞
節の構造と意味、日本語難易構文が従える不定詞節の構造と意味、英語難易構文が従える不定詞句の構造と
意味。からまでの研究に共通していることは、同等比較節を導くas、不定詞句を導くto、不定詞節を導く
forなどに、モダリティを標示する機能を持つ「モダライザー」のステイタスを持たせることである。このこ
とによって、モダリティの概念を拡張することが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、以下の点にある。従来、モダリティは、「話し手の態度・判断・意見を表す」、「非現実世界へ
の状況の位置づけを表す」などとされ、法助動詞や法副詞の意味分析が中心となっていた。本研究では、モダリ
ティを、「事柄（命題内容、事態、状況）に対する概念主体（典型的には、話し手）の捉え方」とみなし、その
定義を大きく拡張した。社会的意義は、英語教育や英和辞典の改善に寄与し得ることである。例えば、「x as
...as y」構文は、「xはyと同じくらい...だ」と理解されているが、本研究によれば、「xの程度は少なくともyほ
どはある」と修正されるべきことになる。

研究成果の概要（英文）：The result of this study is closely related to the expansion of the concept
of modality, and it can essentially be summarized as follows: the structure and meaning of
comparative clauses, the structure and meaning of the infinitival phrase which quasi-modal
constructions take, the structure and meaning of For infinitival clauses, the structure and
meaning of infinitival clauses which Japanese “tough constructions” take, and the structure and
meaning of infinitival phrases which English tough constructions take.

研究分野：英語学・言語学

キーワード：モダリティ 法助動詞 不定詞 比較構文 語用論 意味論 否定 時制

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、モダリティは、擬似法助動詞、比較、視点、場所句倒置、感情性、不定詞節といった言語現象と独立的に分析され、これらの現象とのつながりはほとんど注目されていなかった。従来、モダリティは、基本的に、「話し手の態度・判断・意見を表す」、「非現実世界への状況の位置づけを表す」、「プロファイルされた事象の非実在性を表す」といった定義がなされ、専ら、法助動詞や法副詞の意味分析が中心となっていた。モダリティの分類に関しても、「根源的モダリティ」と「認識的モダリティ」という二分類、「認識的モダリティ」、「束縛的モダリティ」、「力動的モダリティ」の三分類という、狭い枠内にとどまっていた。

2. 研究の目的

本研究の根本的な目的は、いくつかの異なる言語現象の分析結果に基づいて、モダリティがカバーし得る範囲を従来よりも拡大することである。具体的には、モダリティを以下のように定義することである。「事柄(命題内容、事態、状況)に関して、単にそれがある(もしくは真である)と述べるのではなく、その事柄に関する情報はどのようにしてもたらされたのか、その事柄はどのようにあるのか、あるべきなのか、その事柄はどのような言語行為の内容となっているのかということを表したり、その事柄に対する概念主体(典型的には、話し手)の捉え方(例えば、知覚や感情、敬意、比較など)を表したりする意味論的なカテゴリーである」。

3. 研究の方法

研究の方法としては、モダリティに関する先行研究を整理してその問題点を明らかにすること、そして、できるだけ多くの事例を収集することからスタートした。次に、以下のような言語現象を分析し、その成果を研究会で発表するとともに、研究論文として出版することを試みた。「モダリティの透明化」、「行為の非実現性・困難性」、「as ... as」構文、「語りの when 節と心理的インパクト」、「For 不定詞節の意味的特質」、「日本語難易構文の補部」、「英語難易構文の補部」。最後に、これらの言語現象の分析結果に基づいて、モダリティがカバーし得る範囲を従来よりも大幅に拡大し得た。

4. 研究成果

研究期間全体を通じて、以下の主たる研究成果が挙げられる。個々の研究成果は、すべて、モダリティの概念の拡張につながっている。

澤田治美(2018a)「視点とその移動の概念に基づく「進行形 + 語りの when 節(narrative when-clause)の意味解釈」『モダリティワークショップ——モダリティに関する意味論的・語用論的研究——』発表論文集第14巻』pp. 1-19.

この論文では、「語りの when 節(narrative when-clause)においては、その事象を目

撃した話し手の心理的インパクトが表出されていることを明らかにした。

澤田治美(2018b)「意味論・語用論を活かした英語の授業——“x as ...as y”構文の意味解釈をめぐって——」(池内正幸・窪 園晴夫・小菅和也(編)『英語学を英語授業に活かす——市川賞の精神を受け継いで——』開拓社, pp. 35-54.

この論文では、“x as ...as y”構文においては、x の程度は、y と同じではなく、「少なくとも y ほどはある」と解釈されるべきであることを論じた。

澤田治美(2019)「モダリティの透明化をめぐって——疑似法助動詞 have to を中心として——」(澤田治美・仁田義雄・山梨正明(編)『場面と主体性・主観性』ひつじ書房, pp. 677-700.

この論文では、疑似法助動詞 have to の解釈においては、have to のテンスとアスペクトが後続の動詞に転移され得ることを明らかにした。

澤田治美(2023a)「For 不定詞節の意味的特質と認識性制約」『英文学研究 支部統合号』15: 169-175.

この論文では、感情述語の補文が想念的 should (=感情) 節と for 不定詞節の両方で表されている事例について、モダリティの観点から意味的に比較した。

澤田治美(2023b)「心的反応性と志向性の間——想念的モダライザーの意味解釈——」(平田一郎・行田勇・保坂道雄・江連和章(編)『ことばの謎に挑む——高見健一教授に捧げる論文集——』開拓社, pp. 217-226.

この論文では、「認識述語は想念的補文に従えることはできない」という、「認識性制約」を提出した。

澤田治美(2023)「実現と発生の間——日本語難易構文の補部における敬語使用と「が/を」選択」『モダリティワークショップ——モダリティに関する意味論的・語用論的研究——発表論文集第 17 巻』pp. 1-67.

この論文では、日本語難易述語の応報を 4 タイプに分類し、それぞれの補部における敬語使用と「が/を」選択について論じた。

澤田治美(2024)「Tough 述語の意味と文法——「意味的二重性」と「Tough 述語補部制約」の観点から」『モダリティワークショップ——モダリティに関する意味論的・語用論的研究——発表論文集第 18 巻』pp. 1-71.

この論文では、「意味的二重性」という概念に基づいて、英語 Tough 述語の補部における to 不定詞句と for 不定詞節の生起の仕方について論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 澤田治美	4. 巻 15
2. 論文標題 「For不定詞節の意味的特質と認識性制約」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『英文学研究 支部統合号』	6. 最初と最後の頁 169-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sawada, Harumi	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 Book Review Ken-Ichi Kadooka (ed.). Japanese Mood and Modality in Systemic Functional Linguistics: Theory and Application. John Benjamins	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 153-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jjl-2022-2055	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Harumi Sawada	4. 巻 16
2. 論文標題 Viewpoint and Ambiguity	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 モダリティワークショップ発表論文集	6. 最初と最後の頁 5-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 澤田治美
2. 発表標題 「語りのwhen節」と倒置現象の意味論と語用論
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田治美
2. 発表標題 Viewpoint and Ambiguity
3. 学会等名 モダリティワークショップ
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 澤田治美・仁田義雄・山梨正明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 781
3. 書名 場面と主体性・主観性	

1. 著者名 澤田治美、他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 309
3. 書名 英語学を英語授業に活かす	

1. 著者名 澤田治美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 192
3. 書名 意味解釈の中のモダリティ（上）	

1. 著者名 澤田治美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 217
3. 書名 意味解釈の中のモダリティ（下）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------